

SJ Interview

SJインタビュー

学際性と国際性を重視し、理想的な交通社会の実現に寄与する

(公財)国際交通安全学会(International Association of Traffic and Safety Sciences 以下、IATSS)は1974年の設立以来、学際的研究調査をはじめとする各種活動をもとに、国の政策への提言、交通分野における国際協力などの成果を発信している。そして、2024年9月17日に創立50周年を迎えた。これまでのIATSSの取り組みの成果と今後のビジョンについて、2015年から会長を務める武内さんにうかがった。

様々な専門分野の会員による学際性を活かした研究調査

IATSSは、Hondaの創業者である本田宗一郎と藤澤武夫の「理想的な交通社会の実現に寄与する」という想いを実現するために、両氏が投じた私財を基本財源として1974年に設立された。1970年代の日本は、モータリゼーションの進展により人々の生活の利便性が高まった一方で、当時死者数が1万人を超えていた交通事故をはじめ、渋滞や交通公害などが問題となっていた。これらの問題を解決するためには、人間、機械、環境の有機的な結びつきの実態を解明することが必要となる。そこで、「交通安全をはじめとする交通社会全般の課題に対し、自由に討議・研究してその成果を社会に提言する」ことを目的にIATSSが設立された。発足時23名だった会員は2024年12月末時点で59名となっている。環境学やサステナビリティ学を専門とする武内さんは交通に限らず、自然・社会・人文等の様々な領域の専門家、評論家などで構成され、学際性を重視していることがIATSSの大きな特徴だという。

「交通問題を追究していくと、技術だけ、あるいは制度だけで解決することはできません。全体像を解明するためには、人の行動様式や精神面などまで含めて考えることが必要です。そうしたアプローチを可能にする環境が発足時からIATSSにはありました。研究者は放っておくと、縦割りになって深くはなるけれど、横に広がらないわけです。私もIATSSに

入会して、会員が横のつながりを持ち、縦割りでできない研究テーマに取り組める点は非常に良いと感じました」。

IATSSでは会員を中心にプロジェクトチームをつくり、プロジェクト単位で研究調査活動に取り組んでいる。武内さんは学際性を発揮できたものとして、2011年の東日本大震災特別プロジェクトを挙げる。

「震災は、交通が遮断されると社会の分断につながることを示しました。私はIATSSとして被災地の復興に貢献すべきだと考え、プロジェクトリーダーとなったのです。医学、工学、法学、経済学など様々な専門分野の皆さんと被災地で、交通に大きな障害が発生した状況を目の当たりにしながら意見を交わしました。各専門分野の英知を結集させれば、より包括的かつ具体的な提案ができることを実感したプロジェクトとなりました。交通の問題を起点に、復興に求められる多様な領域の論点を整理し、最終的に提言書にまとめ、私から当時の復興大臣に手渡しました」。また、国の交通安全基本計画の策定にあたって設置される専門委員会においては、委員として多くの会員が選ばれている。こうした実績も50年にわたる活動の成果の一つだと武内さんは強調する。

アジアの将来を担う若きリーダーを育成する

学際性とともIATSSが重視しているのは国際性である。アジアの将来を担う人材を育



(公財)国際交通安全学会 会長
東京大学未来ビジョン研究センター 特任教授
武内和彦さん

成する場として、IATSSは1985年にIATSSフォーラムを三重県鈴鹿市に設立した。IATSSフォーラムでは、アジア10カ国から研修生を招聘。研修生は8週間の集中したセミナーやフィールドスタディ、グループ研究を通して自国発展のためにリーダーシップを磨くのである(2024年までの39年間で1143名の卒業生を輩出)。当初、研修生は東南アジアの国だけだったが、2019年に武内さんがインドからも受け入れることにした。「インド工科大学デリー校に国際的に有名な交通安全の専門家がおられ、この方が推薦する研修生が加われば、IATSSフォーラムの視野が広がると考えました。インドの研修生は議論をリードするなど、良い刺激を与えています」。

そして、武内さんはIATSS本体とIATSSフォーラムのさらなる連携強化のため、2024年度から新たなプログラムを導入した。

「従来のフィールドスタディは研修生に街づくりのような地域開発の事例を見せることが中心でした。それをIATSSの活動や研究成果を理解してもらうためのプログラムに変えたのです。例えば、栃木県宇都宮市のLRT(次世代型路面電車システム)の建設に関わった会員のところに赴き、開業までの経緯や、開業によって宇都宮の街がどう変化したか、研修生に詳細を説明してもらいました。モビリティと関連づけながら、リーダーシップを学ぶというIATSSならではのプログラムになったと思います」。

次の10年の活動を見据えた新たなビジョンを発表

昨年9月に開催されたIATSSの創立50周年記念式典(下記参照)で、武内さんは「IATSS VISION 2024」を発表した。コモン・ビジョンは「誰一人として取り残されることのない安全で持続可能かつポジティブな交通社会を、国内外を問わず実現するために、私たちは共通の責任を負う」。

「交通安全から、さらに広く問題を捉えるための新たな展開が必要だと考え、『モビリティ』『サステナビリティ』『ウェルビーイング』という3つの軸を設定しました。『サステナビリティ』はこれからの時代のキーワードで、持続可能な社会の実現は環境だけでなく、社会や経済の視点での課題解決につながります。そして、私たちの活動の目的は人の幸福に寄与することですから『ウェルビーイング』も重要です。個人がより元気になることによって、社会に対して新しい価値を創造する機会をもたらします。交通事故関連を含む『モビリティ』と合わせ、この3つを互いに呼応させ、ポジティブな循環を生み出す次の10年の学会活動を推進し、コモン・ビジョンの実現を目指します」。

今後の交通社会における大きな課題はエネルギーの問題だと武内さんは考えている。

「化石燃料から再生可能エネルギーへの転換によって、地域の自然資源を活用する方向に社会がシフトしていくでしょう。今、疲弊している農山漁村地域が再生可能エネルギーを通して大きく変わりうるわけです。しかし、学術の世界でエネルギーと農山漁村地域の問題が一緒に議論されることはほとんどありません。今後はエネルギーの分野の専門家とも連携し、従来の学術体系ではできない、新しい研究の枠組みをつくる先導的役割をIATSSが果たす必要があると思っています」。

創立50周年記念式典
～理想的な交通社会の実現に向けて～

IATSSの創立50周年記念式典が昨年9月17日、虎ノ門ヒルズフォーラム(東京都港区)で開催された。

第1部の冒頭ではIATSSの活動に対し、「交通安全に関する国際的かつ学際的な研究機関として様々な活動を通じ、交通行政運営などに多大な貢献をした」として、警察庁の露木康浩 長官と内閣府の松林高樹 大臣官房審議官が会長の武内さんに、それぞれ感謝状を授与した。

次に、来賓を代表して貝原典也 本田技研工業(株)取締役代表執行役副社長が「弊社では技術開発によるモビリティの性能向上をはじめ様々な取り組みを行い 様々な要因により引き起こされる事故に対応していますが、Honda個社でできることには限りがあります。IATSSの皆さまが進めている交通文化の醸成という活動領域においては、大きな成果を期待しています。また、弊社もこの領域でともに活動させていただきたいと思っています」と挨拶した。

そして、「IATSS VISION 2024」と、新たな事業として「小学生・中学生・高校生等を対象とした交通安全教育に関する助成」を紹介。この事業は将来の交通社会を担う若者の交通安全活動を称賛し、その活動の発展的な継続を目的としている。開始するにあたり、高校生による先進的な活動として、熊本県立矢部高等学校 二輪車競技部(P6参照)の長年の取り組みを特別表彰した。同部には表彰状と、副賞としてHondaの普通自動

二輪免許教習車「NX400L」(1台)および電動スクーター「EM1 e:」(3台)、交通教育センターレインボー熊本での特別講習が贈呈された。

第2部は宇宙飛行士 毛利衛さんによる基調講演でスタート。毛利さんは宇宙視点で見た地球の環境や持続可能性などについて語った。

最後は、毛利さんと武内さん、帝塚山大学 名誉教授 蓮花一己さん、大阪公立大学 教授 永田潤子さんによるパネルディスカッションとなった。NPO 法人ガイ・イニシアティブ代表 野中ともよさんがモデレーターとなり、進化を続けるモビリティ社会の中で、理想的な交通社会の実現に向けて今後の学会活動をどのように進化させていくべきか、話し合った。



「IATSS VISION 2024」を発表する武内さん



武内さんが二輪車競技部部長 五所愛華さんに表彰状を贈呈



今後の学会活動について話し合ったパネルディスカッション